

宇山 智彦

北大スラブ研究センターは、1955年、ソ連・東欧研究を全国的に推進する拠点として、ロシア極東に近い札幌に設立された。前身が設置された53年から数えれば60年近くの間、スラブ研は大きく発展を遂げた。現在、専任の教授・准教授は11人だが、助教や若手研究員を含めれば34人、客員教員、事務スタッフや院生も加えれば約90人を擁し、センターと名乗ってはいても、実質的には一大研究所となっている。

80年代後半からしばらくの間、旧ソ連・東欧研究者は、社会主義体制の改革・崩壊と体制転換を分析する作業に追われたが、それが一段落した後、スラブ研は二つの方向で新境地を開いてきた。一つは、伝統的なロシア・中東欧研究に加え、中央アジア・カフカス諸国

## 北大「スラブ研」活動知って

# 「境界」越え 地域に発信

やウクライナなど、ソ連から独立したロシア以外の諸国や、ロシアの中の非ロシア人地域の研究に力を注ぐようになったことである。

近年、「旧ソ連・東欧」に替えて、「スラブ・ユーラシア地域」という表現を使うことが増えたのは、旧社会主義圏というだけでなく、多様な文化が織りなす空間としてこの地域を見るようになったことを反映している。

もう一つは、スラブ・ユーラシアと他の地域の比較や、外部世界との境界をまたがって起きる現象の研究といった、比較研究・境界研究を広く展開するようになったことである。現在スラブ研が取り組む二大プロジェクト、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」とグローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」は、まさに比較研究・境界研究をテーマとしている。地域研究者は対象地域の固有性を重視するため、中国研究、インド研究といった研究者「コミュニティ」の「境界」を乗り越えることは実は難しいのだ

が、スラブ研の主導によりさまざまな地域の研究者が集い、「帝国」「越境」「持続的経済発展」など共通のキーワードを使って比較の議論をする機会が増えている。

スラブ研の活動は世界的に知られており、外国から著名な研究者や若手が、共同研究やキャリアアップのために多く訪れている。一方、学部生を持っていないこともあってか、道内、いや、北大の学生の間でさえ、スラブ研の存在は必ずしもよく知られていない。

そこで新企画として、スラブ・ユーラシア地域の最新の事情や研究成果を広く公開する講演会を、定期的に開催することにした。29日に開く第1回は、「中央アジアから見る世界の『今』」(民主化とユーラシア国際秩序再編)と題し、ロシアを中心とする旧ソ連諸国再

統合の試み、米軍のアフガンスタン撤退準備、権威主義体制の継続や民主化運動など、さまざまな動きの中で揺れる中央アジア諸国の現状と、それが今の世界にとって持つ意味を、私が話すことになっている。その後約3カ月おきに、野村素己氏によるバルカンの言語、望月哲男氏によるロシア文学、岩下明裕氏による国境研究についての講演が予定されている。北大の特色ある研究組織であるスラブ研の研究成果を、今後とも地域社会に発信していきたい。



第1回スラブ研究センター公開講演会は29日(金)午後6時30分から北大人文・社会科学総合教育研究棟(W棟)409室で開かれる。無料。事前の申し込みは不要。

うやま・ともひこ 北大スラブ研究センター長。67年、東京生まれ。東大大学院博士課程中退。96年、北大スラブ研究センター助教、06年に教授、今年5月から現職。専門は中央アジア近代史・現代政治、比較帝国史。編著書に「中央アジアを知るための60章」(明石書店)、「日本の中央アジア外交」(北大出版会)、「ユーラシア世界1 (東)と(西)」(東大出版会)など。10年、大同生命の地域研究奨励賞を受けた。